九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

王陽明・その隠遁の思い : 陽明文録を読む

藪, 敏也
久留米工業高等専門学校

https://doi.org/10.15017/18055

出版情報：中国哲学論集. 5, pp.18-32, 1979-10-01. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

王陽明・その隠遁の思い

――陽明文録を読む――

薮　敏也

はじめに

空虚静寂を排撃し、実学ー実践躬行の学ーを唱え、事上磨錬を説く陽明は、一方において「隠遁」をしきりに思った人であった。「王文成公全書」巻四・五所収の書簡七十篇（三十八歳より五十二歳まで）の中、「隠遁」の語そのものは使用しないものの、それに類した語を使用したり、またその思いを語ったりした箇所は実に二十五篇に及んでいる。

一体、何が陽明をして「隠遁」の思いに駆らせるのであろうか。それには次の三項目が考えられる。

一、晦養・厚積。退居して己れの根本を養うこと。

一、末世的時代に対しての抵抗。特に泥沼のごとき政・官界に対しての焦燥と絶望。

一、孝養。

これは仏教者的隠遁、「名聞・利益を離れて山林などに住み、仏道修行に心をかけてたしなむ」（中村元「仏教語大辞典」）ところの隠遁とは、前半は相通じながら、後半は異なる儒教的隠遁ともいうべきものであろう。

私は右の三項目を中心として、陽明の隠遁精神、というよりも「隠遁」に対しての陽明の思いー心情の傾斜ーについて、それも陽明自身の言葉で語りながら、併せて仏教者的隠遁との相違を考えてみたい。

一

陽明はその夫人・諸氏の弟、諸用明に書を寄せて（全書、巻四）「（家より）仕官をすすめる書がきた。私は身を

潔くするものではないが、心からこれを願う理由は、時代ー世間を避け隠れなければならないような末世ーのせいだけではない、また吾が学いまだ成らず、歳月人を待たざるがためでもある。このまま更に数年を過ごしたならば、私の精神はいよいよ疲弊し、勉め進もうとしても不可能となり、遂には学問修行を成就することなく生涯を終わることになるだろう。（身を潔くする思いが）私のやむべからざる心からの念願であるゆえんである」と言っている。

「身を潔くする」とは、孟子が万章に語った言葉の中の一語で（孟子、万章下）「聖人の行ないというものは、或いは世を避けて隠遁し或いは仕官し、或いは国を去り或いは国にとどまるなどいろいろであるが、つまるところは自分の身を潔白に正しく保つということである。」孟子にあっては「隠遁」にも「仕官」にも通用した「身を潔くする」という一語を、「隠遁」の意に限定した陽明の心情は記憶されるべきである。しかしながら陽明の念願は遂げられない。「（私の辞職・隠遁を）老祖（父・龍山公）をはじめとして親戚一同が悦ばない。どうして決然とし実行できるであろうか。」と陽明はいたずらに嘆くのみである。

この書は正徳六年（一五一一）陽明四十歳のときのものである。この年、陽明は京師にあり、正月、吏部験封清吏司主事、二月、会試同考試官となり、十月、文選清吏司員外郎に陞（のぼ）っている。（年譜）。一体、何が陽明をして隠遁の思いに駆らせるのであろうか。

同書において、陽明はまた「君子は、ただ学業の修まらないのを憂えるだけである。科挙の合格の遅速は問題ではない。私が平常賢弟に期待するところは、科挙よりも大切なものである」と戒め、更に夫人の甥たちの科挙受験について「年少にして志あるを喜ばないわけではない。しかしながら私は、年少者が科挙に応ずることを決して結構なことだとは思わない」と述べながら、「不幸にして遂に志を得たならば、きっと彼は彼の人生を誤まるにちがいない」と断じ、誰でもが祝福するであろう科挙及第に対して疑懼の念を表明している。「年少」にして「志を得る」ことを「不幸」と言い、「彼の人生を誤まるものだ」と断ずる陽明は、しからば「年少者」に何を求めるのであろうか。「すぐれた素質のある青年は、すべからく己れの根本を養い（晦養（かいよう））、内にたくわえを多くする、即ち学問修行を積むことに心がけねばならない（厚積（こうし））」と忠告する。「晦養」とはいわゆる木晦（もくかい）の訓（おしえ）である。朱子、名は熹、字は元晦。この字は朱子が十四歳になったとき、父の友人で、父の死後朱子が父事

し師事した劉屏山（子翬、字は彦冲一一一四〇七）が命名したもので、屏山はそのときこれを祝して「木は根に晦くして春容曄（かがや）き敷（あまね）し。人は身に晦くして神明内に腴（こ）ゆ」と言った。これはその徳を外に輝かすことなくできるだけ内に蔵する、則ち学における「静養」の工夫を述べたものである。（岡田武彦「朱子の父と師」西南学院大学文理論集十三巻二号。安岡正篤「王陽明伝」）

ところで「晦養・厚積」はなぜ必要なのであろうか。

更に陽明は程子の語（二程全書巻十二。和刻本。以下同じ）を引いて言う。「天道といえども内に集中（翕聚（きゅうしゅう））しない限り外に発現することはできない。まして人はなおさらのこと（内に集中して根本を養わなければならない）」と。「晦養・厚積」は程子の「翕聚」であり、それはまた学問修行成就のための工夫であった。「美しい花びらからは実が生（な）らないのは、その華美（うつくし）さがあまりにも表面に現われたからだ。賢明な君たちが私の言を迂遠と思わなければ、君たちは必ずや進歩するところがあろう。」

「年少」にして「志を得る」ということは「その華美さがあまりにも（早く）表面に現われる」ことである。それでは「実が生らない」ことになる。そうであれば「不幸」なことであり、「素質ある青年」は「彼の生を誤まる」ことになる。陽明が「晦養・厚積」を勧めたゆえんはここにあったのである。

しからば「根本を養う」とはどういうことか。陽明は、年来の講友、湛甘泉の学と自己の学との差異を迂曲（まわりくどいこと）と直截（ちょくせつ（きっぱりしていること））としながら「私のいわゆる良知を致すの説は、天理を体認するの説とそれほど大きな差異はない。ほんの直截と迂曲の差があるだけである。草木の栽培に譬えると、良知を致すということは、草木の根本の生命力を培養して、これを枝葉に到らせることである。天理を体認するということは、その枝葉を茂盛（さかん）にして、これを根本に復（かえ）そうとすることである。しかし根本の生命力を培養しさえすれば、いうまでもなくそれは枝葉に到る。だから枝葉を茂盛にしようとするならば、根本の生命力を培養しさえすればよいのである」（全書巻六「毛古庵憲副に与う」）と根本の生命力の培養を強調する。

「草木の栽培」に譬えられた「良知を致すの説」については、この小論の及ぶところではないので触れないが、何はともあれ「晦養・厚積」は、「賢明な青年たち」への陽明の切なる「期待」であった、と同時に陽明自身の「隠遁」

の目的でもあったのである。

二

さて陽明の「隠遁」と仏教者の「隠遁」とはどう異なるのであろうか。陽明は程子の語を引きながら、儒教と仏教の差異について述べているが（全書巻四「黄宗賢・応原忠に答う」）、引くところの程子の語が充分ではないので、ここでは程子の原文を引くことにする。

「かの釈氏の学（仏教）には、敬以て内を直くするということはある。しかし義以て外を方にするということはない。だから滞固なる（心がとどこおって動かない）ものは枯槁（枯れて生気のない静寂な世界）に入り、疏通なる（事にこだわることなく心がよく動く）ものは肆恣（しし（気まま。わがまま））となる。これが仏教の狭隘なるところである。吾が道はそうではなく、性に従うだけである。この道理は、聖人が易の中で詳細に述べている。」（二程全書巻五）。また「釈氏には覚の理があるから、敬以て内を直くするということはできる。しかし義以て外を方にするということがないから、その内を直くするということも、要するにその根本は間違っていることになる。」（二程全書巻二）

陽明はこの程子の論で「儒釈の差異は八九分（ほとんど）説きつくされている」としてこの書を結んでいる。

「敬以て内を直くす」「義以て外を方にす」は、『易経』坤卦文言伝の語であるが、『程氏易伝』では次のように注する。「敬を主として心を直くし、義を守って外（形・行為）を方正にする。敬が確立して心は直く、義が現われて外が方正になる。義は（内から）外に現われるものであって、外にあるものではない。敬義が確立すると徳は盛大になる。」と。「敬」とはもと心の内に深くつつしむことであるが、程伊川は主一無適（一を主として他に適（ゆ）かぬ、心を専一にして雑念をまじえないこと）とする。（二程全書巻十六）。「義」とは外（形・行為）が宜しきにかなう道。

『程氏易伝』に従えば、「敬」と「義」の関係は内と外の関係であり、心と形・行為の関係である。重要なことは、外＝形・行為はそれ自体として存在するのではなく、内＝心が表面化したものであるということである。「義」は（

内から）外に現われるものであって、外にあるものではない」のである。この「外は内の現われ」という考えが、陽明によって徹底化されることになる。

梁日孚（りょうじっぷ）が「事物の理を窮めるにはどうしたらよいか」と問われて、「例えば親に仕えるときには、孝の理を窮めようとし、君に仕えるときには、忠の理を窮めようとする」と答えたのをうけて、陽明は「忠孝の理は、君や親の身にあるだろうか。それとも自己の心にあるだろうか。（必ずや自己の心にあるにちがいない）。そうだとすれば、（事物の理を窮めるということは）わが心の理を窮めることにほかならない」（伝習録巻上）と言う。「事物の理を窮めること」は、「心の理を窮めること」である。

同じく「敬」について梁日孚が「敬とは一を主にすることである。例えば読書するときには専心読書し、事に対処するときには専心その事に対処する」と答えたのに対して、陽明は「それでは酒を飲むときには専心酒を飲み、色を好むときには専心色を好む（ことも一を主とすることになるが）、そのようなことは外物を追うことであって、どうして居敬の工夫と言えようか」と言い、「一」の意味を説く。「一とは天理である。一を主とするとは、専心天理に心をおくことである。もし一を主とすることだけを知って、一とはとりもなおさず理であるということを知らなければ、事あるときには外物を追い、事がないときには空となるだろう」と言う。ではどうすればよいのか。「事の有無にかかわらず、専心天理に心をおいて工夫する、だから居敬はそのまま窮理となる」と陽明は言う。

具体的に考えてみる。「孝養をつくす」ということは「専心天理に心をおいて」の工夫である。「一＝理を主とするところ」の工夫である。すなわちそれは「居敬」の工夫ということである。また同時に「親に仕えるときには孝の理を窮めようとする」のであり、「孝の理を窮める」ことは、「わが心の理を窮める」ことにほかならない。とすれば「孝養をつくす」という「居敬」の工夫はそのまま「窮理」ということになる。陽明は「専一に理を窮めるところを敬に居るといい、敬に居りながら精密なところを理を窮めるというのである」（同上）と言う。換言すれば、「専一に孝養をつくす」ことは「敬に居る」ことであり、「専一に孝養をつくし」ながら、その孝養の心を更に「精密」にしていく工夫を「理を窮める」というのである。かくして「敬に居りながら、別に心があって理を窮めるのでもなければ、また理を窮めるとき、別に心があって敬に居るのでもない。居敬と窮理とは名称は違うけれども、工夫はあく

までも一つである。」（同上）。陽明学が朱子学の徹底と解されるゆえんである。（楠本正継「宋明時代儒学思想の研究」）

「居敬」と「窮理」とは決して二つの事ではない。「天地間にはただ一つの事があるだけである。」（伝習録巻上）それは「専心天理に心をおいて」の工夫であった。陽明はこれを『易経』坤卦文言伝の両句をもって説く。

「『易』に『敬以て内を直くし、義以て外を方にす』とあるが、敬とは事のないときの義であり、義とは事のあるときの敬である。両句は合せて一つの事を説いているのである。（一つの事の両面を説いているのである。）孔子が『己を修むるに敬を以てす』と言ったときには、義を説く必要はなく、孟子が『義を集む』と言ったときには、敬を説く必要はなかった。それはここのところさえ会得できれば、あとはどのような説き方をしょうと、工夫は結局一つであるからである。」（伝習録巻上）

「敬以て内を直くす」は「居敬」に当り、「義以て外を方にす」は「窮理」に当る。「敬」も「義」も「一つの事の両面を説いているのである。」言うまでもなく、「一つの事」とは「専心天理に心をおいて」の工夫である。「工夫は結局一つである。」

さて、『程氏易伝』によれば、敬義の関係は内外の関係であり、心と形・行為の関係であった。外はそれ自体として存在するのではなく、内から現われたものであった。「義は（内から）外に現われるものであって、外にあるものではない。」この考えでは内外つまり敬義の関係は、論理的には先後の関係である。内（敬）から外（義）へという関係である。居敬と窮理の関係で言えば、「専一に孝養をつくす」ことが先にあって、後に「その孝養の心を精密にする」ことがあるということになる。居敬が先、窮理が後である。

ところが陽明にあっては、内（敬）と外（義）の関係ではなく、言うなれば照応関係といったものになる。「孝養をつくす（＝敬）」ことが「孝養の理を窮める」ことになる。居敬が窮理になる。つまり「敬以て内を直くする」ことは、「義以て外を方にする」ことになる。更に言えば同時存在と言ってもよい。一枚の銅貨の裏と表である。「孝養をつくす」ことがそのまま「孝養の理を窮める」ことであり、「孝養の理を窮める」ことがそのまま「孝養をつくす」ことである。内が外であり、外が内である。程氏の「外は内の現われ」という考えが、陽明によって徹底化され

たと言ったのはこの意味においてである。

ところで仏教には「敬以て内を直くする」ということはあるが、「義以て外を方にする」ということはない。しかるに内（敬）と外（義）は照応関係であり、同時存在である。内があって外がないというようなことはあり得ない。いかに「敬以て内を直くする」ということがあったとしても、「義以て外を方にする」ということがなければ、それは「根本的に間違っている。」これが程子ならびに陽明の仏教批判の論理である。

三

仏教における「内」について考えてみる。

陽明は辰州の諸生に書を与えて（全書巻四）「諸友は名声を求めることなく、己れに切実なるところにおいて着実に工夫を積んでいかなければならない。前に言った静座のことは、坐禅入定のためではなく、放心を収めることを説いた『小学』嘉言篇の補助的方法である」と言っている。この書は陽明が竜場からの帰途、辰州でかつての門人たちに知行合一を説き、諸生と僧寺に静坐して性の本体を悟らせようとしたが（年譜正徳五年）、そのときの静坐は坐禅入定とは違うと言って諸生を戒めたものである。

「好んで仙仏を論じた」（年譜正徳九年）王嘉秀の請益の巻に書して（全書巻八）、陽明は「君子の学は（『論語』憲問篇に言うように）己れの修養のためにするものである。己れのためにするとなれば、己れ（自我意識）に克（か）たなければならない。己れに克てば己れがなくなる。己れがないということが無我である。ところが世の学者の中には自私自利の心に執着しながら、自分では己れのためにしていると思いこんだり、とらえどころのない（抽象的な）現実無視の空無の世界に逃避しながら、自分では無我の境にいると思いこんだりしているものが多く見うけられる。彼等は、自分では聖人の学に志しているのだと思ってはいるが、実は、末世の仏老の邪道に陥りながら、自分では気づいていないのである」と言っている。陽明の言う「無我」とは何か。

「人の心は、本来天然の理であって、精精明明、少しの汚染もない。それが無我である」（伝習録巻下）。しかしそれはいわゆる空無ではない。なぜなら「無我であれば、自然に謙虚となることができる。謙虚はもろもろの善の本

であるからである。」（同上）「無我」とは、換言すれば「専心天理に心をおいて」の工夫であると言うことができる。具体的に言えば、「聖人の心は、明鏡のようなもので、少しのくもりもないから磨く必要はない。しかし普通人の心は、処々よごれのついた鏡のようなものであるから、必ず磨いてそれを払い落とさなければならない。そうすればちょっとの塵がついてもすぐにわかって、力を入れることもなしに払い落とされる。そうすると自然に仁の本体を識ることができる。」（同上）かくして「胸中には一点の（我）もあってはならない。あればそれは傲（おごり）である。」（同上）「傲」とは強烈な自我意識と言ってもよい。それは「心中の賊」（全書巻四「楊仕徳・薛尚謙に与う」）であり、「もろもろの悪のはじまりである」（伝習録巻下）。実に「人間にとっての最大の病弊は傲の一字に尽きる」（同上）「己れに克つ」ことが強調されるゆえんである。しからば「空無」とは何か。

「空無」とは、「断滅禅定（自己のもろもろの意を断ち滅ぼした無念無想の境地）」（伝習録巻上）を言う。「空無の世界に逃避する」とは、「仏氏のいわゆる種性（しゅしょう）を断滅して槁木死灰に入る」（伝習録巻中）ことである。「種性」とは種姓のことで、家族・家族の姓・血統・家柄・氏族などを意味する。（「仏教語大辞典」）つまり世の中の一切のきずなを断ちきって、寂滅の世界に入ることを意味する。それは生命なき「槁木死灰」の世界である。一見、それは「無我」のように見えはするが、実は「家を出てわが身を善くする」、（二程全書巻十四）、「生死の苦しみを恐れて、それから解脱しようとする、自分の利益のため」（同上）の工夫であるにすぎない。そこには家もなく、人倫もなく、「自私自利の心への執着」が存在するのみである。それは「我」であり「汚染」である。「克たるべき己れ」であると言わなければならない。とても「専心天理に心をおいて」の工夫と言うことはできない。程氏も言う、「（釈氏の教は）決して公道とは言えない。それはただ形而上の世界に達しようと努めるだけで、形而下の工夫がない。（形而下の工夫がなければ）形而上の世界に達することがどうしてできようか。もともと（釈氏の教においては）（形而上下の世界）が連続せずして断絶があるのである。（釈氏の教は）道ではない。」（同上）

ところで、仏教にはないとされる「外」とは何のことであろうか。

陽明は仏教を批判して「かの釈氏は人倫をおろそかにし、物の道理を忘れて空寂に陥るが、言うまでもなくそれは心を明らかにする（もの）と言うことはできない」（全書巻五「夏敦夫に与う」）と言う。また世儒を批判して「

世の儒者は、外部の知識の研究考察につとめて、これをその心に本づけることを知らないが、これは理を窮める（もの）と言うことはできない」（同上）と言っている。

前述のように、人の心は「本来天然の理」であり、「無我」であった。外（窮理）は内（居敬）の現われであり、内（居敬）は外（窮理）であり外（窮理）は内（居敬）であった。この陽明の考えから見れば、「人倫をおろそかにし、物の道理を忘れて空寂に陥った」釈氏は、「その心を明らかにするものと言うことはできない」し、また「外部の知識の研究考察につとめて、これをその心に本づけることを知らなかった」世儒は、「理を窮めるものと言うことはできない。」陽明の思想が釈氏や世儒と異なるゆえんである。

右の書の前年に書かれた「象山文集序」（全書巻七）では、「仏老の空虚は、人倫・事物の常理を遺棄して、そのいわゆる吾が心なるものを明らかにしょうとするけれども、（彼等は）物理はとりもなおさず吾が心であって、決して遺棄してはならないということを知らない」と言っている。「物理はとりもなおさず吾が心」とは何か。

「親に孝たらんとするの心があれば、そこには孝の理があり、親に孝たらんとするの心がなければ、孝の理もない。同じように、君に忠たらんとするの心があれば、そこには忠の理があり、君に忠たらんとするの心がなければ、忠の理もない。このように理は、吾が心をおいては決して存在するものではない。」（伝習録巻中）

「親に孝たらんとする」ことは「物」であり、それは同時に「孝の理」を窮めることである。「孝の理」を窮めることは、「心の理」を窮めることであった。「物理はとりもなおさず吾が心」なのである。

仏老は「吾が心を明らかにしよう」とするけれども、「物理は即ち吾が心」ということを知らないために、「人倫・物理を遺棄する」ことになる。「家を出て我が身を善く」することになる。それは「自私自利の心に執着する」ことであった。かくして仏老の帰着するところは、「そもそも禅の説は、人倫を棄て物理を遺（す）てる。その結果するところ、（禅の説では）天下国家を治めることはできない」（「象山文集序」）ということになる。

四

陽明の「隠遁」の目的は「晦養・厚積」にあった。「隠遁」の場所は山間であり、「晦養・厚積」の方法は講習で

ある。「講習」は『易経』兌卦に「象に曰く、麗澤は兌なり。君子以て朋友講習す」とあるにもとづく。

二つの沢が近い処に並んでいるのは兌の卦の象である。沢が近い処に二つ並んでいれば、互いに相潤おす。君子はこの象を観て、それにのっとり、友達が一緒に学問を研究し、互いに教えたり教えられたりする。そこで友達が互いに益を得るのである。（公田連太郎「易経講話」）

湛甘泉が陽明洞を去ること数十里のところ、蕭山の湘湖のほとりに草亭を建てた。陽明洞は、浙江省紹興の東南の会稽山にあり、陽明は周辺の風物を愛してここに室を築いた。このことを聞いた陽明は非常に喜んで、「まことに良友が相集会して共に此道（しどう（儒学の道））に進み励むことができたならば、この世にこれ以上の楽しみがあるだろうか。この楽しみにくらべれば、取るに足りない表面の栄辱得喪のごときは、歯牙にかけるに足りようか」（全書巻四「王純甫に与う㈠」）と言っている。またこの書より八年後、江西省南部の反乱を鎮定し、故郷に帰ることを期待しながら、「やがて辞職して帰郷するだろう。山間の講習の楽しみを予想すると、思わず欣（よろこ）びに満たされることである」（同上「聞人邦英・邦正に寄す㈡」）と言っている。

仏教者的隠遁との相違がここにある。山林に隠棲し、坐禅瞑想に沈潜するのではなくて、山間に相集会し、朋友と共に聖人の学問を研究し、互いに教えられて裨益し合って向上していくところに陽明の理想はあった。

「仁をなすのは自分自身であり。他人が関与できることではない。しかしながら学問修行の進み工合を観るには、朋友はたとえ一日であってもなければならないものである。……（ところで君は職を辞し、朋友と別れて故郷にいるが）孤独で共に（講習に励む朋友のない）嘆きはないであろうか」（同上「希淵に寄す㈠」）と故郷に独り居る弟子を戒めている。「講習」の勧めである。

また「大学・中庸の註は最近書きあげたけれども、私の涵養するところがまだ純一でなく、博学博識を求め、速成を求めようとするところがあったので焼き捨ててしまった。いささか進歩したとは思うものの、真に自得深造の境地には至っていないからだ。将来、山中（陽明洞）で諸賢と商量（考え量る・相談する）して共にこれを完成しょう」（同上「陸元静に寄す㈠」）とも言い、さらには、希顔らが科挙に及第した知らせを聞いて喜びながらも、「諸君の今日のために喜こぶのではない。将来、山中（の講習）に良友を得たことを喜こぶのである」（同上「希顔・台仲・明徳・

尚謙・原静に与う」）とまで言っている。陽明が山間講習に何を期待し、いかに楽しみとしていたかが理解できるであろう。

ところで「禅の説は人倫を棄て物理を遺てる。その結果するところ、（禅の説では）天下国家を治めることはできない」と仏教を批判した陽明が、講習のためとはいえ「天下国家を遺（す）て」て山間に隠遁しょうとするのはなぜであろうか。

正徳五年、北京大興隆寺で、黄宗賢が陽明と甘泉に「他日、天台・鴈蕩（浙江省）に二君のために二つの草亭を作ろう」（湛甘泉撰「陽明先生墓誌銘」）と言った。やがて宗賢は職を辞して帰郷し、草亭を結んで待っていた。ところが甘泉は母を亡くし、広東省増城に帰郷することになる。（全書巻四「黄宗賢に与う四」）。陽明は「天台よりの書を拝受した。山間のおもむきを聞き羨やましい限りである。草亭を結んで待っていただいているとのこと、ありがたいことではあるが、貴意に副うことができないのは恥ずかしいことである。…甘泉はやがて増城に帰るだろう。そうなると道程はるかに距って、他日、天台鴈蕩間に草亭を結んでの三人講習の約束も空しくなるだろう」と嘆き、「僕はといえば、近くにいるにかかわらず、家の事情で辞職を決することができないでいる。（それどころか）挙げられて（正徳九年四月、南京鴻臚寺卿に陞ったことか）遂に北山の移文となる」（同上）と言う。

「北山の移文」とは『古文真宝後集』巻の五にのせる文章の名である。（以下、新釈漢文大系「古文真宝（後集）」による。）六朝の宋の周顒（しゅうぎょう）（字は彦倫（げんりん））は、初めは江蘇省江寧府にある鍾（しょう）山（南京の東北にあるので北山ともいう）に隠れ住んだが、後には出でて仕えて会稽山の海塩県令となり、またこの鍾山に立ち寄ろうとした。孔徳章（名は稚圭、会稽の人）は周顒が隠逸の素志を変じて仕えたのをいやしみ、鍾山（北山）の神霊の意に仮託して、官府の通達文書に擬してこの文を書き、二度と鍾山（北山）に立ち入らせまいとした。政府の廻状を移文、移書というので、この文章を「北山移文」と名づけた。北山の神は、周顒のような節操を守らない人間がこの山を通ると、山水草木が汚れるから立ち寄ることを許さないというのである。

志明らかに節操固く凡俗を抜きん出た姿、心さわやかに浮世の塵埃を超出した想い、その節操は白雪に比すべく、その心志は青雲をも凌いで真直ぐに立ち上る。隠者とはそういう人柄である。

隠者の人柄は万物の上に高く聳え立ち、その徳は霞の外に清く輝く。千金を塵芥として顧みず、天子の位をもわらぐつのように脱ぎ捨てる。

世に周子というものあり、俗中の俊才である。学問あり博識あり、老荘に通じまた教養もある。……隠遁の心なく北山に隠棲した。北山の操正しい桧や桂を誘いだまし、美しい雲や谷を欺いた。うわべは川や沢に世を避けていたけれど、心は爵禄にからみついていた。

御召の車の馬が北山の谷に嘶（いなな）き、鶴頭の文書（隠者を招く文書）が岡を登ってくると、周子は身を馳せ気もそぞろに志は変り心変りした。仕官した彼は眉をあげて座に並び、袂をひるがえして酒宴に列した。道服は焼き裂き捨て、塵に汚れた俗吏の顔でそり返り、栄華を求めてあくせくと走りまわった。

今や周子は蘭草の佩（おびもの（幽人隠士の高潔さを示す））を解き捨て、塵に汚れた官吏の冠の綬（ひも）で身の自由を束縛する生活に入った。

ところで今、海塩県令の任期満ち、旅装を整えて帝都へ向けて舟路を急いでいる。或いはこの山の草堂に歩を運ぶことがあるかも知れない。どうしてこの碧（みどり）の嶺を、丹（あか）き崖を、かおり草の薫る小路を、澄みきった池の水を、辱しめ汚させることができようか。

さあ、どうか皆でこの俗士の駕を廻らして、北山の神のために周子を謝絶しょう。

言うまでもなく周顒には周顒の言い分があったに違いない。星川清孝氏が言われるように「その内容は、六朝のはじめから盛んであった隠逸風流を尊び、世俗を賤しむ、いわゆる隠士の高踏思想であるが、……。そして周顒がこの隠者の生活を捨てて、却って官界に入ったことは、この思想に反するものであるから、これらの流派の人から批判され俗人として厳しく排斥されたのであった。」周顒の行為の是非善悪はしばらく措くとしても、「家累に牽かれて遅遅として未だ決せず。挙げられて遂に北山の移文となる」と言った陽明の嘆き―隠遁への心情の傾斜は、まことに深いと言わなければならない。

五

陽明は、蔡希淵に末世に処する方法を説きながら、「私は厚禄を頂戴し、地方のなすべき任務があるので（南京太僕寺少卿）、身を脱して潜かに逃れ帰りたいとは思うけれども、いかにもむつかしい」（全書巻四「希淵に寄す㈠」）と言い、翌年（正徳八年）にも、希淵が陽明の出処について意見を述べたのに感謝しながら、「世事のために辞職を直ちに決行することができないでいる。そのために恥じ入っている次第である。しかしながら結局は貴君の教示のようにしなければならないと思う」（同上「希淵に寄す㈡」）と言う。

「職を辞す」ことを「身を脱して逃る」と言い、「辞職することができないでいるのが恥ずかしい」とする陽明の心情は、言うまでもなく「北山の移文」に連なる。仏教や老荘を「空虚静寂」として排撃しながら、「人生はともすれば拘束多く、不自由なことである。かえって世俗から超脱した老荘や仏教の方がよい」（同上「黄宗賢に与う㈣」）とまで言っている。陽明をして「世俗から超脱した老荘や仏教の方がよい」とまで言わしめるものは何であろうか。

正徳十二年から十三年にかけて、陽明は都察院左僉都御史として、反乱平定のため江西南部の贛（かん）に在った。軍事的にも政治的にも成功を収めた（山本正一「王陽明」）。ところが、陽明は「士風は日々に軽薄になり、立派な人たちと思っていたものも、皆（時勢に）附和雷同して聖学を忌むものとする」と、自分と相容れざる周囲の状勢を憾みに思い、「私の心は落ち着かず忙しく、いまだに逃避することもなく、（思えば）まことに堂に閉じこめられた燕雀である」と嘆く。「逃避」とは「身を脱して逃れる」ことである。「（その上）官途は泥沼のようなものである。（ひとたび）その中に没入すれば、脱出することはなかなかむつかしい。私は（この中に）脚をふみはずした見本である。鑒（かんが）みざるべからず」と戒める。

「士風」は自分と合わず、自分は「堂に閉じこめられた燕雀」であれば、「拘束多く不自由」な人生である。「世俗から超脱した老荘・仏教」に心情が傾斜するのも当然であろう。まして「官途が泥沼のようなもの」であればなおさらである。更にもう一つ、病勢のすすんだことである。「籠中の病翼、或は能く冥鴻の末に附して帰らんこと、未だ知るべからざるなり」（全書巻四「希淵に寄す㈢」）と結んで望郷の思いを訴える。「冥鴻の末」とは天高く飛ぶ雁の末尾のこと。「冥鴻」はまた世を避ける隠者のたとえでもある。

この書は、正徳十三年に書かれているが、陽明は弘治十五年と正徳十年に病気休暇を願う上奏文を二度（三月と六

月）奉っている。

「休暇を請う上奏文の許しが今に至るもとどかないので、已むを得ずじっと待っている」（同上「薛尚謙に与う㈠」）と言い、また「私は、二度の上奏文で辞職を願ったけれども、いまだにその返報がない。私は決意した、二度許されなければ三度願い、三度許されなければ五度願い六度願って、必ず返報を得るまでは願いつづけるつもりである」（同上「陸元静に与う㈡」）と決意を表明する。ところが翌年（正徳十四年）、祖母の死を知ることにより、この「決意」はまさに実行に移されようとする。「正月二日、家よりの書信を得て、去冬十月、祖母が亡くなられたことを知った。身を割（さ）かれるような思いがする。私は職守につながれて帰り遁れるすべもなく、今また懇ろに上奏文を奉った。もしどうしても許可を得ることができなければ、径往の図をなそうと思う」（同上「希淵に寄す㈣」）「径往の図」とは、ただちに往く、則ちただちに実行するという意味である。

しかしながら、「径往の図」は結局は「決意」にとどまり、実行には移されなかった。「陽明をつないだ職守」はあまりにも強く、「官途は泥沼のようなもの」であった。「ひとたびその中に没入すれば、脱出することはなかなかむつかしい。」陽明は自分の無力を痛感する。病状も悪く、気力も弱い。故郷の西樵山に隠棲している湛甘泉の問に答えた書の中の次の文章は、当時の陽明の心情を語って余すところがない。

「僕はまだ五十歳にもならないのに、病み衰えること六七十翁のごとくである。日夜、陽明洞に帰り（朝に道を聞いて）夕べに死する志を遂げたいと思っている。（ために）三たび上疏して（辞職を願ったが）いまだに許されない。（思いきって）印を棄てて帰郷し、貴君のように隠棲したいとは思うものの、そのようなことをしたら世間を驚かして大変なことになるだろう。」（同上「甘泉に答う㈠」）しかし一方では、「祖母の老衰もいよいよ甚しく、ぜひ一度会っておきたく、老いた父も書を寄せて、しきりに帰郷をうながす。僕の気持ちはいよいよ暗い。」（同上）いかに孝心の厚かった陽明とはいえ、彼を取り巻く状勢はいかんともすることができない。まさに身体これ谷（きわ）まった思いであったろう。「世の中の一つ一つの事は、あたかも狂風驟雨中の落葉のごときものである。（舞い来たり舞い去ること）忽ちのうちであって、いずこに所を定むことができるであろうか」（同上）。

この嘆きは二年後、再び甘泉に繰り返されることになる。前掲書では「許しを待っておれば、冬が去るのを待ち春

が訪れれば、必ずや（僕の思いは）遂げられるであろう」と期待はしたものの、「僕の病気休暇の願いは、まだ遂げられないでいる。今また帰省を請願しようと思うけれども、進退はどうなるかわからない。憂いの多い塵の世にあって、僕の落ちつくところは、結局いずこにあるのであろうか」と言い、「時々念及してこれを教うべし」（同上「甘泉に答う㈡」）と訴えている。

六

正徳十六年春三月、武宗が崩じ世宗が即位した。陽明は「私が帰り逃れる日も間もなくであろう。聖天子の新政は英明である」（全書巻五「鄒謙之に与う㈠」）と期待したけれども、召用の勅命あり北京へ上ることになる。「私はこの両年来、血気も衰え、また世に用いられんとする志もない。近く勅を奉じて北京へ上るが、途中、故郷に老いた父の安否を尋ねて孝養の道をつくしたい」（同上「夏敦夫に与う」）と訴え、六月、老父を思う切々たる情をこめて「便道に帰省するを乞うの疏」を奉る。「私が奉った帰省を乞うの疏は、当局は已に認めて奏上したと聞いている。もし勅許があったならば、（今度こそ末長く故郷の山沢に逃れることになるだろう」（同「陸元静に与う㈠」）と最後の希望を託する。

結局、政治状勢の変化により召用のことは中止され、陽明は南京兵部尚書に陞（のぼ）り、同時に帰郷を許されることとなった。

「八月越に至り、九月余姚に帰る。先祖の墓に参り、（生誕の）瑞雲棲を訪れ、胎衣（産時の服）を蔵してある地を指して久しく袖を涙に濡らした。幼くして永訣した母に孝養をつくすことができず、祖母の死に会して葬ることができなかったことを悼み悲しんだのである、しかしこれより日々宗族親友と宴遊し……。」（年譜正徳十六年）

かくしてここに、永年の念願が実現することになる。

「ちかごろ、この山間に遠く近くより至るもの百余人。そのため頗る警発され、此学（しがく）がますます的確簡易なることを見得する。まことに此学は三王に考えて謬らず、百世聖人を俟（ま）ちて惑わざるものである。」（全書巻五「路賓王に答う」）　（一九七九・六・二九）